

# 米国で復興を学ぶ

## 被災地の学生 東京で壮行会 本県からは3人

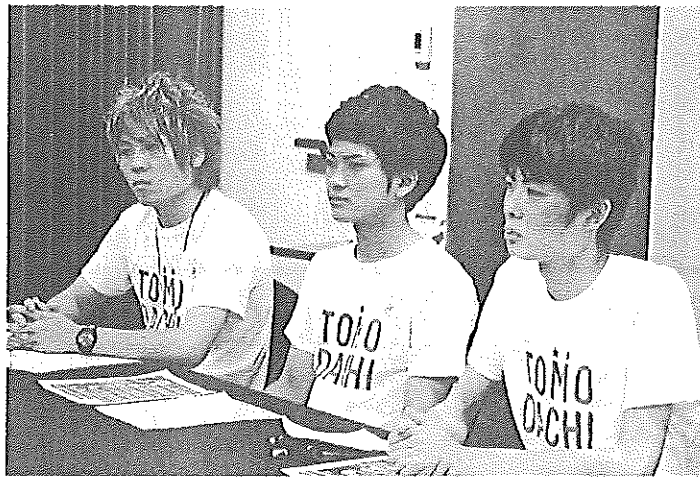
【東京支社】教育支援グローバル基金(東京)が被災地支援の一環で米国に派遣する学生の壮行会は6日、米大使館で開かれた。本県からは3人の学生が渡米し、米国のハリケーン被害からの復興状況などを学ぶ。

派遣される9人のうち、大槌高卒で米国在住の小川彩加さんを除く8人が参加。ルース駐日米大使は「世界を見て刺激を受け、あすを担うリーダーになってほしい」と激励した。

米国派遣は同基金の「東北大1年の上沢知真英さん」大船渡高卒。IIは「将来は大船渡で災害に強いまちづくりをめざしたい。そのためにハリケーンで建物が壊れ、多くの人が傷ついた米国で復興対策を学びたい」と抱負を語る。

宇都宮大1年の千葉

国の人たちと積極的に交流し、自分の考えを深めたい。将来は貧しい人を助ける仕事をしたいと考えており、支援の在り方を探りたい」と話す。



米国派遣の壮行会に臨む上沢知洋さん(右)と千葉真英さん(中)

### 計土風

復興の道は遠く険しい。だが、世界で起きた過去の災害からヒントを得ることは

できる。それを米国で探ろうと、本県など被災地出身の大学生9人がきょう出発する▼2005年に南部を襲ったハリケーン「カトリナ」。01年に世界を震撼させた米中核同時テロ。この二つを題材に、2週間のプロگرامは復興政策から心のケア、コミュニケーション維持まで幅広い▼日本の官民によるトヨタ構想の一つ。参加する大船渡市出身で宇都宮大1年の千葉真英さんは、震災で母親と祖母を失った。将来、復興事業を行う会社を立ち上げるため、米国の被災地再生を検証したいという▼金石市出身で、6月から米国留学中の小川彩加さんも現地に加わる。父母、祖父母、姉の家族全員を失った彼女に出發前、

話を聞いた。過酷な経験をしているのに、表情には陰りが無い。留学まで支えてくれた全ての人に感謝しています」との言葉が胸に響いた▼ミシガン州の留学先から支援団体のビヨンドトゥモロー(東京)を通じて届いた近況には、子どもと笑顔でランタン作りをする写真があった。順調に米国生活を始めたこと安堵する▼震災後、本県の児童生徒が各国に招待されている。そこで得たものは、貴重な資源として地域に積み重なっていく。一人一人の心に「全ての人への感謝」がある限り。